W
学位論文
2398
2

2398

博士（人間科学）学位論文　概要書

ペストの文化誌

――ヨーロッパの民衆文化と疫病――

1997年1月

早稲田大学人間科学部

蔵持不三也

本稿は、ヨーロッパの民衆文化と疫病、とくにペスト（黒死病）との位相を、歴史人類学的視点から考察したものである。この人類史上もっとも恐るべき病が、何千万という無辜の人命を奪い、文化を破壊したということ自体に何ら疑念を抱くものではない。だが、その一方で、ペストはまた「文化を創った」のではないか。本稿の主眼は、そうしたペストの負性に目を向けるだけでなく、それがヨーロッパ社会において果たした歴史的役割を跡付けるところにある。

筆者は、これまでヨーロッパ各地でさまざまな民俗調査を行ってきた。そこで強く関心を引きつけられたのは、これら一連の調査で向き合った少なからぬ祝祭が、伝統的と言われれば言われるほど、その起源譚やドラマトゥルギーにペストのイメージを包含しているということであった。また、たとえばウィーンやブダペストなどに残されているランド・マークとしてのペスト記念碑やマーストリヒトのペスト・ハウス、ドイツの山村で何百年も受け継がれている聖史劇など、ペストの記憶を今に伝える文化的・歴史的装置も数多い。なぜか。何ほどか断定的なことを言おうとするには、一々の事例を個別的に精査しなければならないはずだが、ともあれ今日、こうした祝祭や記念はしかじかの都市の観光戦略に組み入れられ、と同時に、それらは住民たちの一種のアイデンティティ・シンボルないしローカル・シンボルともなっているのである。いわば、ペストにまつわるおぞましい集団的記憶が、明らかに地域社会の統合シンボルともなっているのだ。

さらに、中世以来、教会は確実な死を意味するペストを、神による断罪とする論理によって教勢を一気に伸ばし、近世の国際的な都市間コミュニケーションは、交易レベルだけでなく、まさに（ペストの）情報交換のレベルにおいても、相互の回路を開くようになった。近代の予防医学の方法論的ないし技術的基盤である検疫・隔離システムも、黒死病を決定的な契機として誕生している。そればかりではない。ペストの瘴気（ミアズマ）を一掃しようとする都市計画や衛生観念の近代的展開にも、この疫病は、そのあまりにも如実な恐怖のイメージによって、根源的に結びついていると思われるのである。

もとよりこうしたことは、未曾有な災禍を克服しようとしてきた、人間のあくなき意志や知性を如実に証明するものではある。このことは、とりもなおさず、人間社会が多大の犠牲を払いつつ、ペストを「文化化」したという事実を端的に物語る。それはまた、ヨーロッパの民衆が、精神的ないしキリスト教的枠組みから離れ、ペストを制度的ないし構造的に外在化してきた歴史でもあるのだ。近代的身体とは、実にそんな歴史の結実点に位置する。そして、ひとたび定立しえた文化は、いわば社会的規範として、逆に人間の行動・思考様式を規制する。筆者は、このメカニズムを「エコ＝カルチャー」と呼ぶが、たとえば中世のキリスト教徒たちが、ユダヤ人たち（＝民族的・宗教的瘴気）に対して行った贖罪行為としての迫害しかり、都市環境から浮浪者や売春婦、病人といった社会的弱者（＝社会的瘴気）を強制収容ないし追放しようとした、近（現）代の都市衛生観しかり、である。

このようにみてくれば、ペストをして単なる文化破壊者とする視点は、その歴史的意味だけでなく、とくにヨーロッパの民衆＝文化それ自体を過小評価することにもなりかねない。つまり、ペスト・イメージのもつ負性と正性とは、まさにヨーロッパ社会に内在するであろう正・負の両側面と、過不足なく符合していると思えるのである。その限りにおいて、ペストとは「ある」のではなく、「創られる」。あるいはそう言ってもよいのだろう。ペストが生きたと社会ペストを生きた社会。ペストのメトドロジーとは、畢竟ここに帰着するが、今もなお執拗に出没するこの疫病が人間に向ける問いは、歴史を貫いて、まことに重いものがある。